

ドストエフスキーにおける 2 項等置表現の修辭的・文体的機能

郡 伸哉

1 はじめに

1.1 「全世界性と全人類性」：ドストエフスキーの思想的立場と言語表現

ドストエフスキーの長篇小説『カラマーゾフの兄弟』《Братья Карамазовы》(1879)と、ドストエフスキーが 1880 年に行ったプーシキンに関する演説は、発表の時期も近く、両者には、さまざまな共通点が観察される（後者はその後ドストエフスキーが発行する『作家の日記』《Дневник писателя》に「プーシキン(小論)」「Пушкин(очерк)»として掲載された。本稿ではこれを「プーシキン演説」と呼ぶことにする）。

「プーシキン演説」でドストエフスキーがうちだした立場は、プーシキンはロシア人にとって「予言と指し示し」であり、彼の創作にあらわれた「全世界性と全人類性」は、キリストの教えを体現するロシアの魂の表現であったというものである。

一方、『カラマーゾフの兄弟』のなかでわれわれが注目したいのは、作中人物イヴァン・カラマーゾフが創作した物語詩「大審問官」《Великий инквизитор》である。これは、異端審問の吹き荒れる 15 世紀セビリアに、人びとの願いにこたえて降りたキリストと、それに対峙する大審問官（異端審問官）をめぐる話であるが、そのなかで大審問官はキリストにむかってこう主張する。福音書におけるキリストの言動、なかでもキリストが人間の自由を重んじたことは、結果として人間から幸福を奪い、人類の統一を不可能にした。そこで、一握りの人間が、人びとから自由という重荷をひきとり、彼らを従わせることこそが、「全世界的、普遍的統一」を実現する唯一の道なのだ。

このように、「大審問官」と「プーシキン演説」には、キリストの教えと〈全世界的調和〉の理念をめぐる対極の立場があらわれている。そのためこれらの作品には、〈全世界的調和〉にかかわるさまざまな表現が数多く観察される。その代表は「全世界性と全人類性」である。それを含めた実際の使用例をまずはみてみよう。そこにみられる共通の特徴をあらかじめいっておくなら、なんらかの語句を 2 つならべてひとまとまりにした表現、すなわち「2 項等置表現」である。

1.2 「大審問官」の場合

まず「大審問官」の主人公が自分の立場をどのように表現しているかをみてみよう。

Приняв „хлебы“, ты бы ответил на всеобщую и вековечную тоску человеческую как единоличного существа, так и целого человечества вместе — это: „пред кем преклониться?“ (ВИ)

「パン」を受け入れていれば、おまえは、人類が、個々の存在としても、種としても、ともに抱える、普遍的で、永続する憂悶に答えることができたはずなのだ——すなわち「誰の前にひれ伏すか？」に。

Великие завоеватели, Тимур и Чингис-ханы, пролетели как вихрь по земле, стремясь завоевать вселенную, но и те, хотя и бессознательно, выразили ту же самую великую потребность человечества ко всемирному и всеобщему единению. Приняв мир и порфиру кесаря, основал бы всемирное царство и дал всемирный покой. (ВИ)

大いなる征服者たち、チムールやチンギスハンのような者たちは、世界を征服せんと地上を旋風のごとく通りすぎていったが、彼らも無意識にはあれ、まさにそれと同じ全世界的で普遍的な統一にたいする人類の大いなる要求を体現していたのだ。世界と皇帝のマントを受けとっていたなら、[おまえは] 全世界的帝国を築くことができ、全世界的平和をもたらすことができただろう。

上の2つの引用の下線部はどれも、〈全世界的調和〉という観念と、それにかかわる事柄をめぐる類義的な2語(句)を等置(等位接続)した表現である。一方、等置という形式に注目するなら、指摘したもの以外に、「個々の存在としても、種としても」、「チムールとチンギスハンのような者たち」(原文は「チムールたちとチンギスハンたち」)、「世界と皇帝のマント」も挙げられ、これだけの範囲で計6個となる。ドストエフスキーにおける2項等置表現の使用頻度の高さがうかがえる。

1.3 「プーシキン演説」の場合

「プーシキン演説」では、〈世界的調和〉の観念にかかわる語の組みあわせはさらに多様である。

Да, назначение русского человека есть бесспорно всеевропейское и всемирное. (Пш)
 そう、ロシア人の使命は、うたがいもなく全ヨーロッパ的で全世界的なものである。

силой братства и братского стремления нашего к воссоединению людей (Пш)
兄弟愛と、人びとの統合をめざすわれわれの兄弟的な志向の力によって

указать исход европейской тоске в своей русской душе, всечеловечной и воссоединяющей
 (Пш)

ヨーロッパ的憂悶への解決を、全人類的で、統合をもたらす、おのれのロシア的魂のなか
 に示すこと

мы уже можем указать на Пушкина, на всемирность и всечеловечность его гения (Пш)
 われわれはすでに指し示すことができる、プーシキンを、彼の天才の全世界性と全人類性
 を

これ以外に、接続詞ではなくコンマを用いた類義語句の並置も多くみられる。

ко всемирному, ко всечеловечески-братскому единению (Пш)

全世界的な、全人類的=兄弟的な統一へ

к самому жизненному воссоединению, к единению всечеловеческому (Пш)

もつとも肝要な統合にむけて、全人類的な統一にむけて

великой, общей гармонии, братского окончательного согласия всех племен по Христову
Евангельскому закону (Пш)

偉大な全体的調和、キリストの福音の掟にもとづくすべての民族の兄弟的な最終的の和合

ここで等位接続詞 **и** を用いず、コンマで2項をならべているのは、各項の概念がかなり近く、同格的な並置として意識されているものと考えられる。ただ、等位接続詞を用いた事例にも、これに近い内容の2項の結合が、(前掲の例も含めて)しばしばみられ、両形式の境界は、(構成要素の統語的なりたちも関与するのだろうが)明確でないようにおもわれる。いずれの形式も、類義的な2項をならべるといふ意識において共通すると考えられる。

1.4 本稿のアプローチについて

以上みてきたように、ドストエフスキーの「大審問官」と「プーシキン演説」では、〈全世界的調和〉の観念をめぐる、そのつど選びだされた、あるいは考えだされた、じつに多様な類義語句の組みあわせが用いられている。そしてそれは、きわめて単純な表現装置である2項等置（接続詞による、または接続詞なしの等位接続）で示されるのである。

本稿では、この2項等置表現がドストエフスキーのテキスト（文学的虚構のテキストと実際の演説テキスト）において担っている修辭的機能および文体的機能を考察する。その際、2項等置表現の一般的なはたらきに関しては、ロマーン・ヤーコブソンの詩学研究を参照しながら考える。

ヤーコブソンにとって「詩的機能」を対象とする詩学研究は、言語のすべての機能を対象とすべき言語学から切り離されるべきではない。そして「詩的機能」は、詩だけでなくすべての言語芸術にあらわれるものであり、さらに言語以外の人間の精神活動全般ともかわるものにとらえられており、じっさい個々の研究ではそうした考察がなされている。

ヤーコブソンの詩学研究の重要なテーマの1つは、詩におけるパラレリズム (parallelism 平行性) である。パラレリズムはレトリック (修辭) の一種ということもできるが、ヤーコブソンにおいては、彼の研究をつらぬく対置図式、すなわち、(ソシュールの「連合関係／連辞関係」に対応する)「選択／結合」の対置、およびそれぞれの軸に重ねられる「相似性／隣接性」の対置と深くかかわっている。本稿ではこの観点もとりいれて、まずは2項等置のはたらき一般を考察し、それをもとにドストエフスキーにおける2項等置表現の実態を観察し、その修辭的・文体的機能、そして背後にある思考に探りを入れたい。

2 2項等置表現の形態と論理

2.1 2項等置とは

2.1.1 対象範囲

文のなかで、2つ（またはそれ以上）の語ないし句ないし節（等位項）が、和をあらわす等位接続詞（ロシア語なら и、英語なら and）によって、ないし接続詞なしで（コンマだけで）ならべられ、1つのまとまりをつくりあげている場合、それを2項等置表現と呼ぶことにする（本稿では、表現ないし表現行為を問題にしたいので、「等位接続」よりも「等置表現」ないし簡略に「等置」という言い方をすることにする）。

ただし、или (or), но (but) などの分離・選択や対比・対置をあらわす等位接続詞で結ばれた等置は、基本的には対象としない。ただしロシア語の接続詞 а (対比ないし追加をあらわし、英語にすると and とも but ともなりうる) は必要に応じてとりあげる。また、и...и...

(both... and...), ни... ни... (neither... nor...), не только... но и... (not only... but also...) などをもちいた相関的な強調表現は、実質的に2項の等置を行っているので考察対象に含む。

ようするに本稿では、和をあらわす2項等置構造をあつかうが、これは見方を変えれば、1つのまとまりが2つにわけられた2肢構造ととらえることもできる。実際、あとでみるドストエフスキーの使用例では、つなぐ意識よりも、わかる意識が感じられることも多い。

そして本稿では、語または句の等置に考察をしばり、3項以上の多項ではなく、2項だけの等置をとりあげる。2項等置は、等置のなかでもっとも単純で、かつシンメトリーをなしているという点で、3項以上の等置とは異なる役割をはたしうる。もちろん3項等置も、3という数によって完全性を示すといった独自のはたらきをなしうるし、ドストエフスキーにおいてはその役割も重要なのだが、今回の考察からはずす。そこでつぎに、2項等置表現の形態を簡単にみておく。

2.1.2 要素の文法カテゴリー

本稿では19世紀のロシア語のテキストをあつかうが、そこでの考察はおおよそ、英語その他のヨーロッパ語の多くにも当てはまるだろう。

等置される2項は文法カテゴリーを共有する。確認の意味で具体的に掲げておくと、2項が名詞句（主語、述語、補語 [目的語含む]）なら格を共有し、形容詞句（名詞修飾、述語）なら性・数・格を共有し（ただし短語尾述語には格の形はない）、動詞句（述語）なら人称を共有し、時制・法・アスペクトも共有することが多い。それ以外に副詞句の場合もある。ロシア語を含めた屈折の豊富な言語では、等置は屈折による語末の音声的一致ないし類似をかなりの頻度で伴うことになる（屈折の少ない英語なら、頭韻などが重要な役割をはたすだろう）。

2.1.3 接続詞つきと接続詞なし

等置 (coordination) の形態は、すでに述べたように、等位接続詞 и (and) によるものにくわえて、接続詞なし（コンマだけ）の場合も、それが接続詞でつなぐ場合と同等のはたらきをするとみなせる場合には対象とする。一方、コンマによる並置が同格 (apposition) のはたらきをする（第2項が第1項を補足・説明する）場合は、等位接続詞で置きかえられないが、両者の境界は必ずしも自明ではないので、それも必要に応じて対象に含める。

一般に、等位接続詞を用いた結合 (syndeton) と接続詞なしの結合 (asyndeton) には文体的な差異があると考えられるが、注目したいのは、接続詞があれば、そこにアクセントにおいて結合や総和を強調するなど、表出性をうちだすことができるのにたいし、接続詞が

なければそれができず、簡潔な印象をあたえることである。そうした違いは、あとでみるドストエフスキーとトゥルゲーネフの文体の差にもみてとれる。

2.2 構造の反復：パラレリズム

2.2.1 2項等置とパラレリズム

本稿では、なんらかの相違を含んだ2項の関係を問題にしたいので、同一語句の反復は対象としない。等置においては、反復されるのは構造である。そして反復される項のあいだには通常、なんらかの内容上の関連がある。一般にこうした構造の反復はパラレリズム（平行性）と呼ぶことができる。パラレリズムという用語でよばれる現象は、旧約聖書に関して注目されて以来、研究がなされるようになり、その後、他のさまざまな文化圏のフォークロア的・伝統的な詩のなかにみいだされている。

文学テキストでパラレリズムが問題にされる場合、基本的に詩的テキストにおける詩行と詩行のあいだの関係が問題にされる。ヤーコブソン (1985 [1966]) がロシアの口承詩「*Ох в горе жить – некручинну быть*」『おお、悲しみのなかに生き、嘆かぬこと』（18世紀にキルシャ・ダニーロフによって記された詩集のなかの1篇）を対象に行った研究もそうである（ただし各行内部の前半後半の関係にも目をむけながら）。

パラレリズムは散文にも観察されるが、その場合でも、注目されるのは、まずは節レベル、あるいはある程度の長さの句レベルのパラレリズムとなる。1語だけを2つならべる2項等置は、節や長い句の等置ほどには文法構造の同一性が目立たないため、パラレリズムの観点から問題にされることはあまりない。しかし等置とは2項間の構造の同一性を保証するものだとすれば、等置はパラレリズムの芽を宿す、あるいはパラレリズムの最小形態となりうるといえるだろう。

一方で、2項を等置すること自体は簡単で、ごくふつうのことである。「野菜と肉を買う」、「駅に行き、電車に乗った」といったぐあいである。こういったものについて、修辭的な意図を問題にする意味はないようにみえるかもしれない。しかしわれわれは形態だけを考察するわけではなく、その形態の表現を含んだテキストをひろくみたくて、それが修辭的・文体的に意味のある2項等置であるか、パラレリズムとしてみることができるかどうかを考える。単純な形態も、反復されればその構造に注意がむけられ、修辭性をおびてくる。とくに重要な内容をその形態に乗せているならば、なおさらである。

2.2.2 福音書の例

まずパラレリズムのわかりやすい例として、ドストエフスキーにとっても重要であった福音書を例にみてみたい。福音書では、とくにイエスのことばにパラレリズムがよくあらわれている。「ヨハネによる福音書」(5:37)をみてみよう。

また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。

まず引用の第2文の下線部分では、知覚を2つの感覚領域（視覚と聴覚）にわけて述べている。これを「父を知らない」とだけ表現しても内容は伝わるが、「見る」と「聞く」にわけることで、より直接的な接触のイメージが伝わり、さらにそれらがともに否定され、「…も…も」と強調されることで、修辭性（レトリック）が浮かんでくる。

一方、引用の第1文の点線部分にも類似のレトリックが認められる。「わたしをお遣わしになった」と「わたしについて証しをしてくださる」を比べると、主体である「父」と対象である「わたし」が、別々の動詞（遣わす／証をする）で結びつけられている（後者は「について」を介しているが）。ただし、両者の関係は従属関係——「遣わした（父）」が従で、「（父が）証をする」が主——で、それにたいし第2文では、2つの述語（動詞＋補語）が等位関係になっている¹。

このように第1文と第2文は、従属関係か等位関係かという違いはあるものの、各文の内部で同じ文法構造（節の構造ないし句の構造）を反復し、それぞれの項に同類的な内容を入れこんだ表現になっている。どちらにも文法の上同一の構造をならべるレトリック、つまりパラレリズムがあるといえる。

もうひとつ、「マタイによる福音書」(10:26-28)をみてみよう。

¹ この「ヨハネ福音書」(5:37)の引用は2文からなりたっているが、ギリシア語原文および King James Version では、第2文はコマで終わり、38節に続いている。それを断ったうえで各言語のテキストを確認しておく。

第1文は、King James Version, English Standard Version では、「遣わす」が関係節内の述語動詞で、「証をする」が主節の述語動詞である。一方、ギリシア語原文とロシア語シノド訳では、「遣わす」が「父」を修飾する分詞で「証をする」が「父」を受ける述語動詞である。ロシア語がギリシア語と近い構文をとりやすいことの一例であろう。

第2文では、English Standard Version では2項のどちらにも主語 you が存在し、King James Version とロシア語シノド訳では you, вы を共通の主語とする動詞＋目的語が等置されている。ギリシア語原文では2項ともに主語が示されていない（動詞が2人称複数形であることで主体は示さる）。ギリシア語と同様のことはロシア語にも起こりうるが、この場合、節の2項等置と句の2項等置の区別はできないことになる。

26 「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。 27 わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。 耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。 28 体は殺しても、魂を殺すことのできない子どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

このなかで26節には節（等位節）レベルのパラレリズムが1つ、27節には節（従属節）レベルのものが2つ、28節には句レベルのもの（動詞+目的語）が1つ、語レベル（名詞）のものが1つ観察される。そして叙述が進むにつれて、節の単位から句の単位へ、句の単位から語の単位へとパラレリズムのレベルが下がっていく。それに応じて単位の長さも縮小されていき、最後には単純な語の等置である「魂も体も」を含む文で終わっている²。

そして、パラレリズムに満ちたこのテキストをつらぬくものは、みえないものとみえるもの、精神的なものと物質的なものの2項対立であり、その対立の止揚である。そして28節の最後いきつく2項等置表現、すなわち「魂も体も」は、その対立と総合をもっとも端的にあらわす表現となっている。

2.2.3 口承詩の例

ヤーコブソンが論文「文法的平行性とそのロシア語における面」(1985[1966])において、パラレリズムの事例としてロシアの口承詩を分析した際、それと関係の深い作品として、『悲しみと不運の物語』《Повесть о Горе-Злочастии》に言及している。これは、口承詩の影響を受けて成立したと推定される17世紀の作者不明の作品であるが、この作品のタイトルのうち、「悲しみと不運」と訳した部分は、一般的には、いま示したように、「悲しみ」と「不運」という類義語をハイフンでつないだ形で表記される。なお、「悲しみ」と訳した *горе* は「不幸、災難」の意味ももっている。この作品のなかでは「悲しみ=不運」が擬人化されているが、それはときに「悲しみ」だけ、ときに「不運」だけ、ときに後者を形容詞にした「不運な悲しみ」の形であらわれ、記録者が作品につけたタイトルは、等位接続詞 *и* でならべた形と、ハイフンで結合した形の両方を含んでいる：《Повесть о Горе и Злочастии, как Горе-Злочастье довело молотца во иноческий чин》（『悲しみと不運の物語、悲しみ=不運が若者を修道僧にした顛末』）。

² ここで述べた各レベルのパラレリズムは、ギリシア語原文にも、確認した2種の英語訳、およびロシア語シノド訳にも、同様に認められる。

このように、この作品のタイトルおよびそれによって擬人的に示される存在は、置きかえ可能な類義語をならべた2項等置表現（およびその変種としてのハイフン結合）であらわされている。この作品と関連する口承詩「Ох в горе жить – некручинну быть」（『おお、悲しみのなかに生き、嘆かぬこと』）を対象にした詳細な分析で、ヤーコブソンは多様な形態のパラレリズムを浮かびあがらせているが、こちらの『悲しみと不運の物語』にも同様のパラレリズムが（ヤーコブソンによれば、口承のものが文学化されることで、損なわれた形で）あらわれている。そしてその物語の内容を端的にあらわすタイトルが、2項等置表現なのである。

2.2.4 パラレリズムの最小形態としての2項等置

福音書における「魂も体も」という2項等置が、反義項による2項対立的世界観を背負っているとすれば、『悲しみと不運の物語』のタイトルおよび作品内の表現は、類義項の2項等置である。両者はそれぞれ違った形で、2項等置がパラレリズムの最小形態であることを示してくれる。

おそらくフォークロア的あるいは古代的な、儀礼性・呪術性をもった詩において、テキストをつらぬく生成の鑄型のようなものだったであろうパラレリズムは、言語表現の発展のなかで、あるいは世俗化、あるいは散文化のなかで、表現技法の1つとなっていったであろう。そんななか、パラレリズムのなかでもっとも単純な2項等置は、ジャンルや表現範型からの自由度が高く、日常的散文表現においても、一定のレトリック的効果を担うものとして使われつづけているのであろう。そして、この形態を自己の文体へと内面化していった作家のひとりがドストエフスキーなのかもしれない。

2.3 2項間の関係

では2項等置表現において、2項の関係のどのような点に注目がむけられるのか。以下では、あとで行う分析の予備作業として、2項の関係の簡単な見取り図を示しておきたい。その際、これもヤーコブソンがうちだした、「選択／結合」ないし「相似性／隣接性」の図式を考慮しながら行いたい。

2.3.1 選択軸と結合軸

選択軸と結合軸の対置、相似性と隣接性の対置について、ヤーコブソンは「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」という論文で以下のように述べている。まず、「発話には、一定の言語存在体の選択 selection と、それから、それらを複雑性のより高度な言語単位に

まとめる結合 combination との、二つの面がある」(ヤーコブソン 1973 [1956]: 23、下線は引用元) と述べたうえでこう書く。

言い換えると、選択（そして、これに対応して代置）は、与えられたメッセージの中ではなく、コードの中に連合された存在体を扱うが、他方、結合の場合は、存在体はコードとメッセージの双方、または実際のメッセージの中においてだけ、連合されている。受信者は、与えられた発話（メッセージ）が、構成部分（文、単語、音素など）の結合であり、構成部分は、あらゆる可能な構成部分の貯蔵所（コード）から選択されたものであることを知覚する。脈絡の諸構成要素は隣接 contiguity の状態にあるが、代置集合のうちでは、類義語の等価性から反義語の共通核に至るまでの間で揺れ動く、いろいろな程度の相似性 similarity によってつながれている。（ヤーコブソン 1973[1956]: 26、下線は引用元）

ようするに、要素どうしが「相似性」でつながるとすれば、それらはなんらかの共通の特徴をもつものとして、メッセージを構成する要素の選択肢となる（「選択」軸上に存在する）ということであり、他方、要素どうしが「隣接性」でつながるとすれば、それらの要素は実際のメッセージのなかでかかわりをもつ（「結合」軸上に存在する）ということである。さらにヤーコブソンは、ある心理テストに関して、つぎのように述べる。

hut 小屋という刺激に対して、ある反応は burnt out 燃えちゃった、または他の反応は is a poor little house 粗末な小さな家だ であった。どちらの反応も陳述的である。しかし前者は純粹に物語的な脈絡を創るのに対して、後者の場合は主語 hut と二重の関係がある：一方に位置的（すなわち統辞的）隣接性が、他方に意味的相似性がある。

(ヤーコブソン 1973[1956]: 39-40)

すなわち、メッセージの構成要素のあいだの関係は、隣接性のみでなりたつ場合もあれば、それにくわえて相似性をもつこともできる。このことは、われわれが2項等置の要素間の関係を考察する際にも念頭においておくべきことである。

同じ論文でヤーコブソンは、パラレリズムに関しても、相似性と隣接性の観点に言及している。すなわち、「隣り合う行の間に強制的な平行性を要求する韻文パターン」においては、「どの言語的——形態的、語彙的、統辞的、句法的——レベルでも、この二種の関係（相似性と隣接性）のうちどちらから現れ」、その結果、「感銘的なほど広汎にわたる形象が創り出され得る」(ヤーコブソン 1973 [1956]: 40)。また、パラレリズムをアツクった論文（ヤ

ーコブソン 1985 [1966]) で行っているロシアの口承詩の詳細な分析にも、この観点は含まれている。

ヤーコブソンは、「言語学と詩学」(1973 [1960]) などにおいて、「相似性が隣接性に重ね合わされた」ものが詩であることをくりかえし述べている。これは、リズム、押韻、その他のパラリズム、すなわち反復構造が、音や意味の相似性を浮かびあがらせ、それらが結合軸上で結びつけられて詩が展開していくということであろう。一方、そうした顕在的・規則的な反復構造に支えられない散文は、「厳密に詩的な言語と厳密に説教的な言語」の「中間的言語分野」に属するため、「詩学にとって複雑な問題を提供する」と述べている³。そのうえで、散文の詩学的研究のすぐれた事例として、プロップやレヴィ＝ストロースによる昔話や神話のプロットの統辭的構造の研究を挙げ、そのうえでリアリズム文学を換喩の原理の観点から(すなわち隣接性の観点から)解明することが、詩学の未開拓の領域として残されていると指摘する(1973 [1960]: 216)⁴。

われわれが考察対象としているのは散文であるが、そのなかで2項等置は、まさに反復構造であり、パラリズムの最小形態である。そこで、これも選択軸(相似性)と結合軸(隣接性)の観点からみることができるはずである。まず、2項等置表現は、2項を文のなかでならべるものであるから、それ自体すでに結合軸の現象である。読み手は当然、その2項の結合が示すものをとらえようとし、さらにそれが文ないしテキストのなかの他の要素と結び結ぶ関係にも目をむけようとする。他方で2項等置は文法カテゴリーを共有する2項をじかにならべるわけだから、読み手にたいして、2項の選択軸上の関係をも考えるように促している。2項等置は、選択軸上であれ統合軸上であれ、読み手に2項の「関係」を考えさせる力をもつという点で、シンプルな装置としてはたらくということである。

そこでわれわれは、2項等置表現をつぎのような形で考察することにしたい。すなわち、一方で、2項等置表現を(選択軸にそった)相似性の観点から、すなわち、各項があらわす概念のあいだの関係からみる。他方で、2項等置表現を(結合軸にそって)隣接性の観点から、要素の結合によって新たな何かを生みだしうるものとしてみる。ここで新たな何かとは、文のレベルに限定せず、テキストないしコンテキストのなかで意味をもつ1つのまとまりを念頭においている。そして、相似性と隣接性は共存しうるものであるから、そのどちらかが優勢となって前面にでてくる起こるだろう。

³ 「厳密に詩的な言語と厳密に説教的な言語」は、ヤーコブソン(1973 [1960]: 194) のいう言語伝達の6機能のうちの2つである詩的機能と説教的(referential 指示的)機能が念頭におかれている。

⁴ ヤーコブソンは、「相似性/隣接性」の対置を、比喩の2類型を用いた「隠喩/換喩」の対置とも重ねあわせている。この比喩の対置の観点は、最近の諸分野の研究に大きな影響をあたえているが、本稿ではこの観点の詳細には触れない。

2.3.2 選択軸（相似性）の観点

まず、相似性の観点から考える。さきほどのヤーコブソンからの引用に、「類義語の等価性から反義語の共通核に至るまでの間で揺れ動く、いろいろな程度の相似性 *similarity*」とあったように、意味の上の共通性をもつことが相似性の本質であり、また、その共通性の程度は類義関係から反義関係までのあいだでさまざまである。しかしこれを具体的に考えようとすると、類義関係 *synonymy* や反義関係 *antonymy* という概念があらわす範囲は、ひろく多様であり、また実際の表現の各項は多義性をおびているのがふつうであるから、2項のあいだの意味上の関係の実相は、きわめて複雑でとらえがたいものとなるだろう。

われわれとしては、2項等置における2項の概念上の関係を明瞭に分類することはできないが、実際のテキストで会うものを実践的に把握する出発点となる程度の整理はしておきたい。そこで以下では、実践的観点から2項等置を、意味上の関係をもとに、かりに (a) 同位項の等置、(b) 反義項の等置、(c) 類義項の等置、(d) その他の等置、とわけて若干の事例を考察し、最後に (e) まとめ、として曖昧性と余剰の効果を考えてみる。

(a) 同位項の等置

1つのカテゴリーに属する別々のもの、たとえば「衣服」のなかの2種をならべた「帽子と手袋」は、同位関係 *co-hyponymy* にあたる同位項を等置したものといえる。同位項は、類義項としてはたらく場合も、反義項としてはたらく場合もあるが、そのどちらでもなく、たんに同位的な2つの事象を挙げるだけの場合もある。いずれにせよ同位項は、意味上の関係が比較的明瞭だといえる。

(b) 反義項の等置

反義関係は、直観的にはおよそつかめるが、その内実は簡単ではない。「男と女」のような相補的で独立した存在をあらわす場合もあれば、「右と左」のような相対的位置関係をあらわす場合もあるし、「誠実と不実」のように単純明快な対置関係とはいえない場合もある。最後の場合、「誠実と卑劣」といった反義セットも可能であろう。また、あるセットが同位語か反義語かは、しばしばとらえ方しだいである。たとえば、人間の活動のなかの2形態ということで「芸術と科学」といえば同位語となる。しかしこれを、感覚を中心とする活動と理性を中心とする活動を対置したものだと考えれば、反義語と受けとることになる。

反義語の2項等置には、2項対立原理による対立の側面に注目させる効果と、対極の2項によって、それが属するカテゴリーの全体に注目させる効果が考えられる。形容詞の場

合、反義語を и (and) で等置すれば撞着語法となるが、これはあとでみる隣接性の観点から考えることができる。

(c) 類義項の等置

類義(同義)関係という、「危惧」と「懸念」といったような、そのまま置きかえる余地が大きいものがまず思い浮かぶが、ここでは、置きかえることは難しいけれども近い関係にあるものも含めて考える。そうした類義項の等置は、2項等置表現のなかでとくに重要な役割をはたすが、それでいながら、類義性の内実はきわめてつかみにくい。類義語をつなぐ「近さ」というものは、対立関係に支えられる反義の関係よりも、いっそう曖昧にみえる。同位関係にある近い語も類義語となりうるだろうが、類義関係はしばしばカテゴリーをまたぐ関係である。包摂関係(上位関係 *hyponymy* / 下位関係 *hyponymy*)に近いものもここに入ってくる。

たとえば「知恵と工夫(で乗りきる)」という表現を考えると、知恵は能力で、工夫は実践だとするならば、異なるカテゴリーの語とみることもできる。しかし「知恵」も「工夫」も「人が考えだした策」をあらわしうる。「知恵で乗りきる」あるいは「工夫で乗りきる」のどちらかだけでも表現に大差はなく、これは類義語を重ねた表現といってよいだろう。

ドストエフスキーの「大審問官」に、*человечество провозгласит устами своей премудрости и науки (ВИ)* 「人類はおのれの英知と科学のことばで宣言するだろう」という表現があるが、ここで「英知」が知的活動の能力ないし成果を意味し、「科学」が知的活動のなかの先端的・体系的形態だとみるならば、両者は包摂の関係にある(すくなくともそういう側面がある)ともいえるだろうし、他方で、両者は通常、使われる場面が異なり、そうした論理的関係にないとみることも可能だろう。

こうした微妙な2項関係は、それぞれの項がもつ含意の広さと、そこからくる2項の組みあわせの解釈の多様さを前に、論理的に説明しきれないだろう。漠然と「近い関係」、「重なる部分がある関係」とでもいうしかない。そして、類義的2項をならべれば、重複すると感じる部分がでてくるため、余剰的な表現となる。ドストエフスキーの「プーシキン演説」の例で、*от сбивчивой и нелепой жизни (Пш)* 「乱れた(一貫性のない)、わけのわからぬ(支離滅裂な)生活から」などもそうした例だろう。

こうした類義的な、そして余剰的な2項等置の効果は何だろうか。まず、2項の共通部分が重ねられることで、そこが強調される。同時に、2項の和によって意味の幅が広がることになる。それは意味の焦点をぼやけさせる可能性もある一方で、全体として厚みをも

った強い表現となる。そして2項の組みあわせを変えれば、類似の新たな等置表現をさらに作っていくことができる。実際、ドストエフスキーはそれをよく行っている。

(d) その他の等置

同位、包摂といったカテゴリー上の関係づけができず、反義ないし類義関係も想定しにくいような2項、つまり概念上の直接的関係がないようにみえる2項等置を、ここでは「その他の等置」と呼んでおく。

名詞の例として、「運命と孤独」を考えてみると、この2項には、同位、反義、類義といった意味論上の関係が認められない。一方で、〈運命に翻弄される人間は、孤独を余儀なくされる〉と考えることはできる。そこには原因と結果の関係が想定されることになるが、これは、結合軸にそった潜在的な隣接性の関係である。これについてはあとで考察する。もしもこういった隣接関係も想定されないような無関係な2項を等置するとすれば、それは3.3で述べる「異質連立」ということになるだろう。

つぎのドストエフスキー「プーシキン演説」の例はどうだろうか。поймешь наконец народ свой и святую правду его (Пш) 「おのれの民衆とその聖なる真実をついには理解するだろう」。このなかで、第2項の「聖なる真実」は、第1項の「民衆」を受けた所有代名詞「その」で修飾されている。「民衆」と「真実」のあいだに意味論上の関係はない。しかし〈民衆が真実を体現する〉といった考えがそこに認められるとするならば、「民衆と真実」という2項の関係は、意味論上の関係（相似性）ではなく、命題を構成しうる要素のあいだの潜在的な構成的関係（隣接性）である。したがってこの表現は、たとえば関係代名詞を用いて、「民衆が体現する聖なる真実」などと1つにまとめることもできる。これは、ひろく「民衆」を提示したあとに、「その真実」へと限定していく過程、書きながら焦点を定めていく過程を顕在化したものともいえるだろう。

動詞に関しては、不定形の等置なら、名詞（ないし形容詞、副詞）の等置と同様に考えればよいが、定形の等置は、1つの主語にたいする2つの述語となる。その場合、同位・反義・類義などの関係よりも、動作の時間的展開を示すことが多いだろう。これも、あとでみる結合軸にそった隣接性の問題としてあつかうことができる。

(e) 選択軸（相似性）の観点のまとめ：曖昧性と余剰

以上みてきたなかで、曖昧な反義性、反義語をならべた撞着語法、曖昧性と余剰を含んだ類義性、あるいは2項のあいだに関係がないこと——これらは同様の機能を担うことができるとおもわれる。すなわち、新鮮さ、意外性、意味の厚みを生じさせると同時に、意

味されるもの、あるいは指示される対象がおかれている現実に想像をむかわせるものともなりうる。後者のことをいいかえるなら、2項の関係の理解の回路を、選択軸（相似性）から結合軸（隣接性）へ移させるはたらかともいえるだろう。論理関係が明快な2項も、そうでない2項も、潜在的な隣接的結合へ思考をむかわせる力をつねにもっているが、後者の方がその力が強いということではできるだろう。

2.3.3 結合軸（隣接性）の観点

くりかえしになるが、各項がテキストから離れた形で（つまり選択軸で）なんらかの意味上の関係をもつところに「相似性」があるとすれば、「隣接性」は、各項がじっさいに配置されるところに（つまり結合軸に）存在する。隣接性については、われわれは、文のなかに実際にあらわれた顕在的結合だけでなく、テキストないしコンテキストから想定される潜在的な結合としても考える。

名詞の例として、たとえば「老人と海」は、同位・反義・類義といった意味上の相似関係はないかわりに、人間とその活動場所という隣接関係をもちうる語をならべたものとなる。他方、意味上の相似的關係が存在するものも隣接関係をもちうる。たとえば反義語の等置である「戦争と平和」は、2項があらわすものの対置だけでなく、両者のあいだでの社会の動き、あるいは両者をまたぐ人間のありようをあらわすこともできる。どちらの2項等置の例も、なんらかのプロットを暗示しうる。2項等置表現のなかに小説全体のプロットが凝縮されれば、そのタイトルともなるわけである。

形容詞の例としては、「正直で、狡猾な（人）」のような矛盾をはらんだ等置では、選択軸（相似性）のなかでは矛盾という以上の意味づけができないので、思考を結合軸（隣接性）へと移させ、これを含む文の単位をもこえて、テキスト、さらにコンテキストにおける人物と環境の関係や関係の変化などに矛盾の解決を求めさせる。

動詞の等置は、それが1つの主語に関する述語となるかぎり、動作の展開、すなわち結合軸（隣接性）へと思考を導く力が強い。ただ、そこにはアスペクトの問題がからんでくる（ロシア語の場合、それは明確であるが、他の言語でも考えうるだろう）。状態の継続や動作の反復をあらわす動詞ならば、「飲みながら、食べた」といった動作の同時性をあらわすことになる（ロシア語なら不完了体動詞の等置）。この場合、選択軸（相似性）に注意をむけさせる可能性が高い。他方、「味見し、捨てる」や、「立って、話しはじめた」など、完了をあらわす動詞（ロシア語では完了体動詞）の等置であれば、動作の継起（先行動作と後続動作）の関係をもつことになり、選択軸（相似性）には注意がむかないことになる。

動詞の2項等置の実際の使用においては、後者の完了アスペクトで動作の継起をあらわす場合のほうがはるかに多いだろう。その場合、2項は文法構造が同じ（相似的）であっても、意味上の相似性はなく、選択軸に目をむけさせる力は弱い。その結果、同時性をあらわす不完了アスペクトの等置に比べて、シンメトリーが感じられず、パラレリズムの性格も弱いといえる。同じことは、名詞や形容詞でも、同位性・反義性といった相似性をもたない2項等置、あるいは類義的なものでも関係の曖昧度が高い2項等置の場合についてもいえることである。しかし、そうした非相似的な2項等置も、くりかえし用いられるならば、2項等置のもつ形式上の平行構造が浮かびあがってくる。このあとみるドストエフスキーのテキストは、まさにそのような例を多く含む。

小説では、その世界を構成する人物や事象がたがいにかかわりあってプロットが展開していく。このかかわりあいには広い意味での隣接性そのものであり、小説のなかのどのようなことばも、（文の範囲内の隣接性だけでなく）プロット展開のなかでの隣接性を秘めている。そのなかで2項等置も、使い方でプロットを反映することも、プロットを活性化することも可能となる。プロットをもたない論理的テキストについていえば、意味上の論理関係をあつかう程度は文学テキストよりも高いだろう。しかし世界を変化、相互作用の相でとらえるような論理的テキストであれば、ことばの生きた結びつきを生み出す程度は高くなるだろう。

くりかえすが、等置された2項は、それらが同位・反義・類義といった意味的關係（相似性）をもつ場合も、そうでない場合もある。いずれの場合でも、2項は、隣接性のなかに、すなわちテキストないしコンテキストのなかにおかれることによって、2項間の相互作用をひきおこし、新たな意味、新たな表現をうみだす可能性をもつ。表現者の立場からみるならば、2項等置表現を考えだすことは、選択軸の空間にも想をめぐらせながら結合軸上に表現を模索していく過程の小さな一歩であり、場合によってそれは、（小説のタイトルのように）その総仕上げともなるだろう。

3 ドストエフスキーの言語・レトリック・文体

これからドストエフスキーにおける2項等置表現を具体的にみていくにあたって、まず、ドストエフスキーの言語表現をあつかったこれまでの研究のなかから、本稿のテーマに関連する重要なものをいくつかとりあげ、論評をくわえておきたい。

3.1 シンタックスの観点

ドストエフスキーの言語の研究のなかで、シンタックス的特徴を詳細に分析したものと
して、イヴァンチコヴァ『ドストエフスキーの芸術的散文のシンタックス』(Иванчикова
2010)がある。そこではドストエフスキーのテキスト(主として文学作品、あわせて評論
テキスト)が、「語り」「描写」「推論」にわけて分析されている。

「語り」と「描写」のシンタックスに関しては、情報伝達的なものと主観的なものがみ
られることが指摘され、後者については、イントネーションの上昇・下降、語順倒置、不
定代名詞その他の主観的語彙による表現などの観点から分析されている。

一方、「推論」のシンタックスに関しては、語りや描写のそれよりもはるかに多様で、い
っそう自由であるという。とくに登場人物が用いる論理的なことばに表出的な意味があた
えられることが述べられている。そして、たとえば『カラマーゾフの兄弟』のスメルジャ
コフや『地下室の手記』の主人公が思考する際の言語は、思考する彼らを描きだす手段と
もなっている。われわれがとりあげる「大審問官」についても同じことがいえるだろう。
推論的テキストは、そうした登場人物のことばだけでなく、語り手のことば(3人称の語
りの場合も、1人称の語りの場合も)、さらには評論のなかにもみいだされる。そしてこの
「推論」のシンタックス的分析全体から浮かびあがってくるのは、推論における口語的な性
格とその表出性、その分析に際してのテーマ/レマの観点の有用性、バフチンが指摘し
た「対話」的性格の存在、そして反復がはたす重要な役割などである。

これらすべてを紹介する余裕はないので、この本において「大審問官」から取られている
例を3つだけみておく。以下の引用の下線を施した部分には、説得をめざすことばの表
出性の高さがみえるであろう。

О, конечно, ты поступил тут гордо и великолепно, как бог, но люди-то, но слабое
бунтующее племя это — они-то боги ли? (ВИ)

おお、もちろん、おまえはそこで、神として誇り高く、威厳をもって振る舞った。だが人々
は、だがこの反乱をおこす弱き者たち——彼らは、神だというのか?

Может ли, может ли он исполнить то, что и ты? (ВИ)

いったい彼[人間]に、おまえと同じことが実行できるというのか、できるというのか?

Знай, что я не боюсь тебя. Знай, что и я был в пустыне, что и я питался акридами и
кореньями, что и я благословлял свободу, которую ты благословил людей, и я готовился

стать в число избранных твоих, в число могучих и сильных с жадной „восполнить число“. Но я очнулся и не захотел служить безумию. Я воротился и примкнул к сонму тех, которые исправили подвиг твой. Я ушел от гордых и воротился к смиренным для счастья этих смиренных. (ВИ)

いいか、わたしはおまえを恐れてはいない。いいか、わたしも荒野にいたことがあるのだ、わたしもイナゴと木の根を食べていたのだ、おまえが人々にむかって祝福した自由を、わたしも祝福していたのだ、わたしもおまえの選良のひとり、強く猛き者のひとりとなれるように、「数を満たす」という思いに燃えて、努めていたのだ。だがわたしは我に返った、そしてこんな狂気の沙汰に仕える気はなくなった。わたしは戻った、そしておまえの偉業を訂正した者の一群に加わった。わたしは誇り高き者たちのもとを去った、そして、これらおとなしき者たちの幸福のために、彼らのもとへ戻った。

引用の1例目は、相手の立場をいったん認めたとうえで、自分の論の主題となる語（「人びと」「彼ら」）を強調して（原文ではとりたての助詞 *-то* をつけて）反論する例である。2例目は語句の単純な反復である。3例目は、単純だが構文の反復になっている。すなわち、はじめの2つは *Знай* 「いいか」で始められ、最初の4つは接続詞 *что*（英語の *that* に相当）が用いられているが、どれも *я* 「わたし」を主語とし、動詞の過去形「～た」が述語となった節が重ねられている（1文目のみは現在形）。そして2つ目以降の4つの動詞は不完了体だが、後半の6つは完了体に変わり、さらに主語 *я* 「わたし」に *и* 「～も」がそえられ、前半と後半の対比も明瞭である。パラレリズムの一種といえるだろう。

3.2 レトリックの観点

ドストエフスキーのレトリックというテーマに関しては、最近、オソーキナ (Осокина 2014, 2019) やリチンスカヤ (Литинская 2021) の研究が発表されている。オソーキナ (Осокина 2019) は、ドストエフスキーのテキストには、つぎのようなレトリックがみられると述べている。すなわち（英語で示すなら）、*amplification*（増幅）、*parallelism*（パラレリズム）、*gradation*（漸層）、*characterismus*（人物描写）、*parcellation*（分割 [ひとつつながりのものを断片にわけける]）、*chiasmus*（交差配列）、*zeugma*（くびき）、*inversion*（転置）、*period*（ペリオドス、完全文）である。

以上のうちパラレリズムについて、オソーキナ (Осокина 2014) が述べていることをみておこう。その際、パラレリズムが集中的にあらわれている例として「プーシキン演説」を引用しているので、まずその一部を引いておく。

Нет, эта гениальная поэма не подражание! Тут уже подсказывается русское решение вопроса, «проклятого вопроса», по народной вере и правде: «Смирись, гордый человек, и прежде всего сломи свою гордость. Смирись, праздный человек, и прежде всего потрудись на родной ниве», вот это решение по народной правде и народному разуму. «Не вне тебя правда, а в тебе самом; найди себя в себе, подчини себя себе, овладей собой – и узришь правду. Не в вещах эта правда, не вне тебя и не за морем где-нибудь, а прежде всего в твоём собственном труде над собою. <...> (Пш)

いや、この独創的な物語詩は模倣ではない！ ここにはすでに、問題にたいする、「呪われた問題」にたいする、民衆の信仰と真実によるロシア的解決が暗示されている。「従順になれ、おごれる人間よ。そして何よりもまず、おのれのおごりを捨てよ。従順になれ、無為なる人間よ。そして何よりもまず、故郷の畑で仕事に励め」——これが民衆の真実と民衆の知恵による解決なのである。「真実はおまえの外にはなく、おまえ自身のなかにある。おのれのなかにおのれをみいだせ、おのれをおのれに従わせよ、おのれを御するのだ、そうすれば真実をみいだすだろう。この真実は、物のなかにはなく、おまえの外にはなく、海の彼方のどこかではなく、何よりもまず、おまえ自身の、おのれを制する仕事のなかにあるのだ。[…]

オソーキナは、これは古典的なパラレリズムの例だという。そして古典そのものである旧約聖書の「詩編」と「イザヤ書」の事例も多く挙げる。その1つ、「詩編 104」（ロシア語シノド訳では103）の28-30節を日本語訳で掲げておく（改行は「/」で示す）。

あなたがお与えになるものを彼らは集め/御手を開かれれば彼らは良い物に満ち足りる。
/御顔を隠されれば彼らは恐れ/息吹を取り上げられれば彼らは息絶え/元の塵に返る。
/あなたは御自分の息を送って彼らを創造し/地の面を新たにされる。

オソーキナは、ドストエフスキーがパラレリズムを多用する要因の1つとして、ドストエフスキーにとって新約聖書が、4年間の流刑中に読むことを許された唯一の書物であったことも挙げている。そして聖書（新旧）のパラレリズムについてこう述べる。「この詩的手法は、他の言語文化のなかに入りこみ、聖書的な構造形態を保ちつつ、地域的特色を帯びるようになった」（オソキナ 2019: 118）。

しかしパラレリズムは、聖書あるいはヘブライ的伝統を受け継ぐところにだけみられるものではない。ヤーコブソンも、中国語やフィン・ウゴル語の詩を含め、世界のさまざまな民族の詩的伝統にパラレリズムがみられることを述べ、ロシアの口承詩については詳細な分析を行っている。さらに最近のさまざまな研究から、パラレリズムのさらなる広がりが見えかかっている⁵。

いずれにせよ、ヨーロッパで生みだされたテキストにパラレリズムがみられるからといって、それを聖書に由来するものとみるのは早計であろう。上に引用した「プーシキン演説」の一節は、たしかにパラレリズムに満ちているが、これはドストエフスキーが、プーシキンの作品に描かれた民衆の知恵を、民衆自身のことばによって伝える部分である。つまりこれは、ドストエフスキーの演説のなかにあつて、彼自身が直接に主張を述べる部分ではなく、素朴で確信にみちた民衆の語り口を模して伝える部分なのである。

そのうえでドストエフスキー自身が用いるパラリズム全般を見渡すならば、その大半は（おそらくヨーロッパ近代の散文におけるパラレリズム全般についてもいえることだろうが）、旧約聖書的な、あるいは口承詩的な、古拙で鑄型にはめたようなものでもないし、また新約聖書のイエスのことばのような、パロックスを含む格言的なものでもなく、事実や論理を積みあげ、主張をたたみかけていくものである。3.1の最後に掲げた「大審問官」からの引用もまたそのようなものである。パラレリズムは、そしてひろくレトリックは、なんらかの特定の伝統の伝達を担うだけでなく、むしろ人間の言語と思考の根底に横たわる文化普遍的なものを反映した現象と考えた方がよいだろう。

3.3 言語的実験の観点

上でみたようなドストエフスキーのシンタックスやレトリックに関する研究、そこに挙げられた事例やその整理分類は、ドストエフスキーの言語の考察を進めるにあたって有益なものである。しかし、そこに示されたドストエフスキーの言語的特徴が、どの程度ドストエフスキーに固有のものなのか、固有な部分があるとして、それはどこからくるのか、という問題は残されたままである。その点、中世ロシア文学を専門とし、ひろく文体(стиль, style [文体=様式])も論じるリハチョーフの論考は大きな示唆をあたえてくれる。

リハチョーフ(Лихачев 1981)によれば、ドストエフスキーには、意味が明瞭でない表現、コンテクストから意味は推測されるものの、曖昧さが残るような表現にしばしば出会うと

⁵ たとえば、Fox (2014) を参照。インドネシアのロテ語の儀礼言語におけるパラレリズムを中心に論じるこの本は、文化人類学と言語学におけるパラレリズム研究の重要性を説き、他の諸言語におけるパラレリズムも概観し、パラレリズム研究にヤーコブソンが果たした役割も論じている。

いう。それはときに「ことばの軽視」という印象をあたえるが、リハチョーフはそれを、「意識的で目的の明確な不正確さ」(Лихачев 1981: 76)と呼ぶ。またドストエフスキーは、(登場人物のことばのなかでも、あるいは語り手のことばのなかでも)地口を好んで用いるが、そこにも意図的なもの、すなわち「ことばの実験を行おうとする志向、異常な語結合をつくりだし、考えこませ、現象のなかに何か新しい側面、新しい関係をあらわにしようとする志向」(1981: 84)をみる。

以下に、リハチョーフが挙げる例のいくつかをみてみよう。まずは、音声、語根など外的に類似することばを、内容の関係を無視してならべる地口の例である。

Компания была чрезвычайно разнообразная и отличалась не только разнообразием, но и безобразием. («Идиот»)

その一行は、きわめて多様な構成で、多様さだけでなく、醜悪さでもきわだっていた。(『白痴』)

ここで「多様さ」という単語は「多様+形態」と分解でき、「醜悪さ」は「欠如+形態」と分解できる同語根語である。またこれとは違って、外的な類似なしに、通常結合できないような概念を結びつけることもある。

она принуждена была встать со своего ложа, в негодовании и в папильотках («Бесъ»)

彼女は、憤慨して、また、カールペーパーをつけて、自分の床から起きあがることを余儀なくされた(『悪霊』)

ここでは、前置詞 **в**+名詞(前置格)が等置されていて、「憤慨」と「カールペーパー」が同等のもののようにならべられている。これは異質なものを結合する効果が目立つ例であるが、気づきにくいものもたくさんあるという。

караульный офицер прибежал с командою и ключами («Бесъ»)

衛兵隊の将校は、部隊をひきつれ、カギを携えて駆けつけた(『悪霊』)

ここでは、随伴を表す前置詞 **с**のあとに、「部隊」と「鍵」が同じ造格で等置されている。さらにもうすこし掲げておく。

молодой парень, ужасно глупый и ужасно много говоривший («Подросток»)
おそろしく愚かで、おそろしくたくさん話す若者 (『未成年』)

усталый и от ходьбы и от мысли («Подросток»)
歩行にも思考にも疲れて (『未成年』)

болезненная девушка <...> чрезвычайной красоты, а вместе с тем и фантастичности
 («Подросток»)
ただならぬ美しさと、また同時に、空想じみたところのある病弱の娘 (『未成年』)

こうした例には、もはやアイロニーやユーモアの意図は感じられず、これは表現法というよりも思考法である、とリハチョーフはいう。「異常な語結合」の事例として、リハチョーフは副詞+動詞の例なども挙げているが、むしろ、いまみたような2項等置の例が多い。こうした、ふつうならつながらないような2項を等置する表現は、じつは、レトリックの用語で「くびき語法」(zeugma) と呼ばれるもの、そのなかでもとくに「異質連立」と呼ぶことができるものである⁶。

「異質連立」は、異質なものが同等なものとしてならべられることであるから、基本的に、等位接続による2項等置の形をとるといえるだろう。そもそも語の「結合」は、最低限2つの語があつてなりたつが、文のなかで2語がじかに関係を取り結ぶとすれば、それは、インド・ヨーロッパ語であれば、支配ないし一致の関係(動詞と補語、修飾語と被修飾語の関係)か、あるいは等位接続ないし同格的並置においてである。いずれの場合にも「異常な語結合」は可能だろうが、支配・一致のような、いわば上下関係にある場合よりも、等置・並置のような水平関係にある場合の方が、内容上の齟齬も、それを際立たせる音声上・語根上の共通性もうちだしやすい。2項等置は、結合の異質性をうち出すという目的にとっても手軽な装置となるということである。

しかしドストエフスキーにおける「異質連立」は、異質性がさほど目立たないものも多く、さらには類縁性と異質性のあいだに位置するような結合も多い。それらは、かならずしも効果をねらったレトリックではなく、リハチョーフのいうように、しばしば思考法的な役割をはたしているようにおもわれる。

⁶ 「異質連立」は、佐々木(2006: 21, 565-568)で用いられている用語。

リハチョーフにとって、ドストエフスキーの言語的「実験」は、ただ言語的なものに終わるものではない。それは、対象の把握と描写における「現実との対話」(Лихачев 1981: 74)という、ドストエフスキー的アプローチのあらわれである。単純にはとらえられない生きた現実接近するそうした志向が、あえて明瞭さをめざさない文体に具現している。このようリハチョーフの考えは、ドストエフスキーの2項等置の使用法——これもまたことばの濫用、「ことばの軽視」という印象をあたえうる——にもあてはめられるようにおもわれる⁷。

さきほど挙げた事例は、どれも小説のなかで、なんらかの人物が出来事を語る部分からとられたものである。一方、本稿で検討の中心におくのは、ドストエフスキーの小説のなかでも、大審問官がキリストを相手に自分の主張を展開する弁論的テキスト、およびドストエフスキー自身が行った演説のテキストである。そうしたテキストの性格上、ことば遊びやアイロニーは、小説の語りにおけるほど自由大胆ではない。しかし慣用や常識からのなんらかのズレを含んだ表現はたくさん使われており、それらもまた、読み手・聞き手に考えこませ、現象のなかになんらかの新しい側面、新しいつながりを発見させる効果をもたらす。もちろん、とくにズレがないような2項等置もたくさん使われている。しかし、必要があれば、語と語のあいだになんらかの波乱を含ませる力、それを含めた多様な用途と効果をもつ修辭装置として、あるいは表現の模索であると同時に思考の模索を行う文体的手段として、ドストエフスキーが2項等置を好んだということは、十分にありうることである。

4 「大審問官」《Великий инквизитор》における2項等置表現

4.1 「大審問官」とその文体的特徴

これから、ドストエフスキーのテキストを実際にみってみる。とりあげるのは「大審問官」と「プーシキン演説」である。これらは、小説の登場人物の弁論と作家自身の演説という違いがあるが、言語表現的には高い共通性をもっている。ただ「大審問官」は、大審問官がキリストを前に自己を正当化するという内容で、自己主張というより自己弁護の性格が強く、それまで溜めこんでいた内面を吐露する告白の性格ももっている。ドストエフスキーの推論型テキストにおいては、論理が感情をともなって高い表出性をもつことを3.1でみたが、「大審問官」の文体はとりわけ、つきつめられた論理が高揚した感情と一体となった、弁論的かつ告白的な文体である。

⁷ ドストエフスキーの言語表現に関するリハチョーフの考え方については、郡(2021)も参照。

4.2 先行テキストとの対話：福音書（1）

「大審問官」において大審問官は、人間に担いきれない自由を人間に求めることで、人間を不幸にしたとあってキリストを非難し、福音書においてイエスを誘惑したサタンの立場こそが正しかったという主張を展開する。したがって、イエスが荒野で悪魔から3つの誘惑を受けたという福音書の記述が重要になるが、大審問官はそれを自分のことばで述べている。そのなかで、第3の誘惑について説明する部分をまずみてみよう。

Когда страшный и премудрый дух поставил тебя на вершине храма и сказал тебе: „Если хочешь узнать, сын ли ты божий, то верзись вниз, ибо сказано про того, что ангелы подхватят и понесут его, и не упадет и не расшибется, и узнаешь тогда, сын ли ты божий, и докажешь тогда, какова вера твоя в отца твоего“, но ты, выслушав, отверг предложение и не поддался и не бросился вниз. (ВИ)

おそろしい知恵深き霊がおまえを神殿の天辺に立たせて、「おまえが神の子かどうかを知りたいなら、下に飛び降りろ、なぜなら神の子なら、天使が受け止めて運んでゆき、落ちることも、けがをすることも無い」といわれているからだ。そうすればおまえが神かどうかをおまえは知るだろうし、そうすればおまえの父への信仰がどれほどのものかをおまえは証明できるだろう」、このようにいったとき、おまえはこれを聞いて提案をしりぞけ、屈することなく、飛び降りることをしなかった。

この引用には、接続詞 и でつながれた2項等置が5箇所ある（下線部）。このうち最初の страшный и премудрый дух 「おそろしい知恵深き霊」は形容詞の2項等置であるが、他の4つの2項等置はすべて動詞の2項等置で、それぞれの2項のあいだには、時間的継起関係ないし論理的因果関係がある。すなわち、〈受け止める→運ぶ〉〈落ちない→けがをしない〉〈知る→証明する〉〈屈しない→飛び降りない〉である。しかしその内容は、2項のうち的一方だけで表現することも十分に可能である。現に、もととなった新約聖書の叙述がそうである。対応する福音書の箇所をみてみよう（改行は「/」で示した）。

「マタイによる福音書」(4: 5-7)

次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、/あなたの足が

石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなたを支える』／と書いてある。」イエスは、『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

「マルコによる福音書」(1: 12-13)

それから、“靈”はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

「ルカによる福音書」(4: 9-12)

そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。というのは、こう書いてあるからだ。／『神はあなたのために天使たちに命じて、／あなたをしっかりと守らせる。』／また、／『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』」／イエスは、『あなたの神である主を試してはならない』と答えている」とお答えになった。

これを「大審問官」の記述と比べてみると、福音書（マタイとルカ）では1つの動詞で述べられていることが、「大審問官」では、2つの動詞で述べられていることがわかる。福音書の内容を説明する「大審問官」のことは、福音書よりも重畳的で余剰的である。

4.3 先行テキストとの対話：福音書（2）

つぎに福音書における悪魔の第1の誘惑を「大審問官」がどう説明しているかをみてみよう。大審問官は、まず福音書におけるイエスの行動を自己流に要約し、それから第1の誘惑について語る。

Вспомни первый вопрос; хоть и не буквально, но смысл его тот: „Ты хочешь идти в мир и идешь с голыми руками, с каким-то обетом свободы, которого они, в простоте своей и в прирожденном бесчинстве своем, не могут и осмыслить, которого боятся они и страшатся, — ибо ничего и никогда не было для человека и для человеческого общества невыносимее свободы! А видишь ли сии камни в этой нагой раскаленной пустыне? Обрати их в хлебы, и за тобой побежит человечество как стадо, благодарное и послушное, хотя и вечно трепещущее, что ты отымешь руку свою и прекратятся им хлебы твои.“ (ВИ)

第一の問いを思いだしてみよ。実際のことばどおりではないが、こういう意味の問いだった。「おまえは世間にでてゆこうとし、そして歩いてゆく、手に何ももたず、ただ自由の誓

約のようなものを口にしながら。その誓約を、人々はおのれの単純さと、生まれつきのおのれの粗雑さのために理解できず、恐れ、こわがる——なぜなら人間にとって、そして人類社会にとって、自由ほど耐えがたいものは、何ひとつ、いちどとしてなかったからだ！さて、この草木も生えぬ灼熱の荒野の石がみえるか？ これらの石をパンに変えよ、そうすれば、人類はおまえのあとを家畜の群のごとく、感謝しながら、従順に、ついていこう、おまえが手を引っこめるのではないか、おまえのパンがなくなるのではないかと、たえずおののきながらも。」

この、石をパンに変えよ、が悪魔の第1の誘惑である。福音書の対応箇所をみてみよう。

「マタイによる福音書」(4:1-4)

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。／『人はパンだけで生きるものではない。／神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」

「ルカによる福音書」(4:1-4)

さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」イエスは、『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。

なお「マルコによる福音書」の記述は、4.2で引用したものに尽き、誘惑の具体的言及はない。

さて、ここでも福音書の叙述は簡潔である（福音書でも、2.2でみたように、イエスのことばは修辞に満ちているが、出来事を伝える地の語りは淡々としている）。これと比べると、「大審問官」は、やはりたくさん表現をつけくわえている。動詞の2項等置だけでなく、副詞句、形容詞の2項等置も多く用いている。要約的に記すと、〈行こうとする、そして行く〉、〈素手で、自由の誓約をもって〉、〈おのれの単純さと、おのれの乱暴さで〉、〈恐れ、慄く〉、〈何ひとつ、いちどとして〉、〈人間のため、人間社会のため〉、〈感謝し、従順な〉である。

4.4 「大審問官」の2項等置のまとめ

これらの2項等置表現は、その内容を要約的に示したところから明らかなように、どれも余剰的ということができるが、比喩的というなら、拡大鏡を使って、観察されるものを拡大表示している、あるいは観察される事態を時間的ないし空間的に広げて、すこしだけクローズアップして提示しているようなものである。「大審問官」の全体は、こうした結合軸上の余剰化・拡大的詳細化を行う2項等置表現に満ちている。

5 ドストエフスキーとトゥルゲーネフの2項等置表現：2つの演説の比較

1880年、プーシキン生誕80年を祝ってモスクワに建てられたプーシキン像の完成を記念する催しでドストエフスキーは演説を行った。そのテキストをこれから詳しくみるまえに、まずは比較対象として、同じ機会にトゥルゲーネフが行った演説をみておきたい。

5.1 トゥルゲーネフの「プーシキン演説」Речь Тургенева о Пушкине

まずドストエフスキーとトゥルゲーネフの思想的立場の違いに簡単に触れておく。ドストエフスキーは、自らの立場を「土壌主義」という独自のことばでうちだしているが、これはピョートル大帝によるロシアの西欧化を評価しながらも、ロシア的伝統に最大の価値をみるという点でスラブ主義に近い保守的なものであった。他方、トゥルゲーネフの思想は、西欧的な政治体制をめざすリベラルなものであった。

そのため2人の作家がプーシキンを顕彰する演説にも大きな違いがある。ドストエフスキーの演説は、真のキリスト教を担うロシア精神の体現者にして予言者というプーシキン観をうちだし、その高揚した語り口で聴衆の熱狂的な反応をひきだした。一方、トゥルゲーネフの演説は、社会における芸術の意義から説きはじめ、真の芸術の開拓者としてプーシキンが遭遇した困難、芸術から政治へと焦点を移していったロシア社会の近過去に言及し、このさき民族的かつ全世界的な芸術を生みだすべきロシアにおける最初の芸術家がプーシキンであったと論じた。全体として、詩的・文学的なロシア語を生みだし、後進に道を切り開いたプーシキンをたたえつつ、冷静な論を提示した。その結果、ドストエフスキーの演説がひきおこした熱狂の陰に隠れるような格好になった。

5.1.1 ハイフンによる結合

トゥルゲーネフのテキストをみてまず気づくのは、ハイフンによって2語を結合する方法をよく使うことである。

нашим первым поэтом-художником (Тург.) われわれの最初の詩人=芸術家
 название национально-всемирного поэта (Тург.) 民族的=全世界的な詩人の名
поэт-эхо (Тург.) 詩人=こだま
поэтом-глашатаем (Тург.) 詩人=宣布者

ハイフン結合でも、副詞的形態の第1項が形容詞的形態の第2項へと副詞的にかかっている場合があるが、上の2つ目の例は、第1項が本来ならば形容詞であるところ、結合のために副詞的形態をとっているもので、第2項と並列的な役割のものである。それを含め、上掲のハイフン結合の例は、同等な2語を1つにまとめたもので、これまでみてきた2項等置表現と同じ線上にある現象とみることができる。ハイフンによる結合は、簡潔性が特徴で、学術的雰囲気もでてくるが、これを用いるのは、論理性を重んじる演説の文章ゆえではある。しかし同じ演説文でも、トゥルゲーネフの文体は、表出性を重んじるドストエフスキーの文体とはかなり異なっている。

5.1.2 コンマによる2項等置

つぎにコンマで2項がならべられた表現をみてみよう。

перестал быть дикарем, животным (Тург.) 野蛮人、動物であることをやめた
народ, простой народ (Тург.) 民衆、ありふれた民衆
наш поэтический, наш литературный язык (Тург.) われらの詩的、われらの文学的言語
 множество образов, типов (Тург.) 数多くのモデル、タイプ
к чтению, к изучению Пушкина (Тург.) プーシキンの読解にむけて、研究にむけて

これらは同格表現とみなせるだろう。つぎに一定の長さのテキストを引用しておこう。

Что нам осталось от Греции? Ее душа осталась нам! Религиозные формы, а за ними научные, также переживают народы, в которых они проявились, но в силу того, что в них есть общего, вечного; поэзия, искусство — в силу того, что есть в них личного, живого. (Тург.)

ギリシアからわれわれに残されたものは何か？ その魂が、われわれに残されたのだ！
宗教の形式と、それにつづく学問の形式もまた、それらがあらわれた諸民族を超えて生き

延びたが、そうなのは、それらの形式のなかに存する共通のもの、永遠のもの、詩、芸術のおかげであり——つまりは、それらのなかに存する人間的なもの、生きたもののおかげなのである。

この引用の第3文はかなり長い。点線部の *Религиозные формы, а за ними научные* 「宗教の形式と、それにつづく学問の形式」には、つなぎのことば *а за ними* 「それにつづく」があるが、実質的に2項等置の一種とみなせる。それ例外のものはコンマのみ、あるいはセミコロン、ダッシュによる並置である。すなわち、まず理由をあらわす *в силу того, что* 「のおかげ」で導かれる句（二重線部）がダッシュで結ばれて、その2つの句の1つ目に、形容詞 *общего, вечного* 「共通の、永遠の」と名詞 *поэзия, искусство* 「詩、芸術」が、それぞれコンマでならべられ、されにそれらがセミコロンでならべられている。そしてその2つ目の句には、形容詞 *личного, живого* 「人間的な（個人の）、生きた」がコンマでならんでいる。これら一連の2項並置は、同格と説明することはできるものの、等位接続詞による2項等置にかなり近いものである。

いずれにしてもここでは、全体として、人間の精神活動を「宗教」と「科学」にわけたうえで、その根本にあるものが「詩」、「芸術」であり、それらは「共通の」、「永遠の」性質をもち、また「人間的な（個人の）」、「生きた」性質をもつことが述べられている。ここで「宗教」と「科学」は同位関係にあり、「詩」と「芸術」は包摂関係にあるが、どちらも慣用的・常識的なとりあわせといえる。その他の並置表現における2項の関係も、きわめて明瞭なものである。

そして、ここで2項が等位接続詞 *и* で結ばれていない点は、やはり重要である。それにより、結合的というよりは並列的・列挙的な提示となっており、語調には冷静さが感じとれる。全体として修辭的でありながらも、おだやかで調和的な像が提示されている。1.2でみたように、ドストエフスキーにおいても、接続詞なしの等置は接続詞 *и* による等置に近いものが多いが、そこにあらわれた表出性の高さにはやはり違いがある。

5.1.3 等位接続詞による2項等置

つぎに等位接続詞 *и* を用いた2項等置表現をみてみよう。

духовную и нравственную физиономию (Тург.) 精神的で道徳的な容貌

свой духовный облик и свой голос (Тург.) おのれの精神的相貌とおのれの声

предчувствуемое и указанное (Тург.) 予感され、指し示された

неуместно и бесплодно (Тург.) 適さず、無益な

небывалые и неотразимые потребности (Тург.) 先例なく、抗しがたい要求

トゥルゲーネフにおいては、等位接続詞による等置は、コンマによるものに比べて少ない。この点、ドストエフスキーと逆である。上記の例における2項の関係は、慣用的結合(1例目)、同位的関係(2例目)、自然な、あるいは曖昧さのないつながり(3~5例目)といえる。

つぎの例には、等位接続詞による等置が2つあるが、これらはトゥルゲーネフの2分法的思考を反映している。

В поэте, как в полном выразителе народной сути, сливаются два основных ее начала: начало восприимчивости и начало самодеятельности, женское и мужское начало <...> (Тург.)

民衆的本質の表現者である詩人のなかでは、その本質の2つの基本的原理が融合している。すなわち、受容性の原理と自己活動性の原理であり、女性的 [原理]と男性的原理である[...]

つぎの例は、2項等置表現ではなく、主語と補語(造格補語「〜に」)のあいだにみられるパラレリズムだが、ここでは事象の変化も2元思考でとらえられている。

Поэт-эхо, по выражению Пушкина, поэт центральный, сам к себе тяготеющий, положительный, как жизнь на покое, — сменился поэтом-глашагаем, центробежным, тяготеющим к другим, отрицательным, как жизнь в движении. (Тург.)

プーシキンの表現を用いるなら、〈詩人=こだま〉、すなわち平安のなかにある生活のごとく、自らにむかう求心的な、プラス極の詩人が、動きのなかにある生活のごとく、他者にむかう遠心的な、マイナス極の〈詩人=宣布者〉に取って代わられたのである⁸。

⁸ 訳文では、読みやすさのために、ハイフンで結合された語に記号〈〉をつけた。なお、「プーシキンの表現」とあるが、それは「Эхо」『こだま』(1831)というタイトルの詩に述べられた詩人観を意味していて、〈詩人=こだま〉という表現自体のことではない。

ここで対比される詩人の2形態は、どちらもハイフン結合であらわされており、それぞれがさらにコンマによる並置をともなっており、文全体がシンメトリーをもった構造物となっている。

5.1.4 トウルゲーネフの2項等置のまとめ

以上をまとめると、トウルゲーネフの演説文には、①ハイフン結合が多い、②コンマが等位接続詞よりも多く使われる、③論理的で明瞭な関係にもとづく並置・等置が多い、④それらを含めたパラレリズムがしばしば2元的世界把握に支えられている、といった特徴が認められる。つけくわえておくと、ドストエフスキーによくみられる3項等置はトウルゲーネフにはあまり観察されない。

5.2 ドストエフスキーの「プーシキン演説」Достоевский «Пушкин (очерк)»

5.2.1 先行テキストとの対話：ゴーゴリ

では、それと比較してドストエフスキーの「プーシキン演説」はどうだろうか。まず、彼の「プーシキン演説」の言語は、さきにみた「大審問官」の言語と、かなりの程度共通性する。そして演説テキストである以上、そもそも修辭性が高く、単純な反復、2項等置表現、3項等置も多い。まず出だしをみてみよう。

«Пушкин есть явление чрезвычайное и, может быть, единственное явление русского духа», — сказал Гоголь. Прибавлю от себя: и пророческое. Да, в появлении его заключается для всех нас, русских, нечто бесспорно пророческое. Пушкин как раз приходит в самом начале правильного самосознания нашего, едва лишь начавшегося и зародившегося в обществе нашем после целого столетия с петровской реформы, и появление его сильно способствует освещению темной дороги нашей новым направляющим светом. В этом-то смысле Пушкин есть пророчество и указание. (Пш)

「プーシキンは、ロシア精神の、並みはずれた、おそらくは無比なる現象である」とゴーゴリはいった。わたしはそこに「予言的な」ということばをつけくわえよう。そう、彼の出現という事態には、われわれロシア人すべてにとって、うたがいもなく予言的な何かがある。プーシキンは、ピョートル大帝の改革以来、まる1世紀が過ぎたわれわれの社会のなかに、ちょうどそれが始まったばかりの、生まれたばかりのときに、われわれの正しい自己意識のまさに始まりのときに、やってきたのだ。そして彼の出現は、われわれの暗き道をわれわれの新しい導きの光で照らしだすよう、つよく促してくれる。まさにこの意味で、プーシキンは予言であり、指し示しなのである。

ドストエフスキーは、まず冒頭から、ゴーゴリがプーシキンについて述べた「並みはずれた」と「無比なる」という2項等置による規定を引用することから始める。そこに自らの規定である「予言的な」をくわえる。そしてそのすぐあとに、「始まったばかりの、生まれたばかりの」という、類義的な2項等置表現を用いる。最後には、自身の規定をあらためて確認するのだが、そこでも独自の2項等置表現を用いる。「プーシキンは予言であり、指し示しである。」この2項も類義語であるが、そのうち1項目の「予言」は、冒頭でゴーゴリの表現に自らが追加した形容詞「予言的」の名詞形であるから、2項目の「指し示し」は、冒頭でのつけたしへの、さらなるつけたしといえる。一貫して2項等置を用いた表現の拡大を行っている。

なんらかの先行テキストを念頭におきながら書くこと自体はふつうのことであるが、ドストエフスキーはそれをこのように顕在化し、利用する。それは先行テキストの「対話」、あるいは「間テキスト性」の事例ともいえる。

5.2.2 先行テキストとの対話：プーシキン『ジプシー』

同様の「対話」的な論の進め方は、これからみる部分にも観察される。すなわちここでも、2項等置表現を含む先行テキストを引用し、それをもとに、あらたな2項等置表現を展開しながら自らの主張を展開するのである。

Не только для мировой гармонии, но даже и для цыган не пригодился несчастный мечтатель, и они выгоняют его — без отмщения, без злобы, величаво и простодушно...

Оставь нас, гордый человек;

Мы дики, нет у нас законов,

Мы не терзаем, не казним.

(Пш)

世界の調和にとってだけでなく、ジプシーたちにとってさえも、不幸な夢想者は無益であり、彼らは主人公を追い払う——復讐せず、悪意をもたず、威厳をもち、純朴に…

われらをそっとしておいてくれ、傲慢な人間よ

われらは野蛮で、われらに法はない

われらは苛むことをせず、罰することをしない。

最初に、「…だけでなく…さえも」という強調的な2項等置があり、ダッシュのあとでは2項等置が2つ重ねられている。1つ目は副詞句（前置詞＋名詞）のセット、2つ目は副詞のセットである。その際、1つ目はコンマで、2つ目は等位接続詞で等置されているが、ここで両形式に意味上の違いはないだろう。そのあとプーシキンの詩のテキストから3行の引用を行う。そこでは1行目も重要だが、2行目と3行目に注目したい。ここはコンマによる言い換え表現になっているが、とくに3行目の下線部は同じ構造をした2項の等置表現になっている。ドストエフスキーはこのあと、この3行目の2項等置表現に若干の変化をくわえながら、このプーシキンの作品の解説を展開していく。そこでは「苛む」と「罰する」という動詞を、主体を入れ替えて、主人公自身の動作をあらわすものとして使っている。

Именно, именно, чуть не по нем, и он злобно растерзает и казнит за свою обиду или <...> сам возопиет, может быть (ибо случалось это), к закону, терзающему и казнящему <...> (Пш)
 まったく、まったく、すこしでも気にいらぬことがあれば、彼は受けた侮辱のゆえに、悪意をもって苛み、罰するか、それとも [...] おそらくは（とういうのも、実際そうなったのだから）、苛み、罰する法を [...] みずから叫び求めるだろう [...]

ここで動詞「苛む」は、プーシキンの原文とはすこし違って、接頭辞つき動詞になっている。また2つ目の2項等置は形容詞的分詞になっている。

もちろん、こうした先行テキストをもたない2項等置表現の数のほうが多いだろう。しかし、さきに行った「大審問官」と福音書のテキストとの比較でもそうだったが、先行テキストとの関係がわかるケースは、ドストエフスキーの文体的特徴をはっきりと浮かびあがらせてくれる。それは、ドストエフスキーのテキストにおける「間テキスト性」ないし「対話性」の特徴もよくあらわしている。ドストエフスキーは、他者のテキストの内容面だけでなく、表現面にも注目し、それに反応しているのである。

さらにこの続きのところでドストエフスキーは、2項等置表現の可能性をいっそう拡大する。以下は、3.2で引用したものと重なる部分だが、ここでは途中を省略し、しばらくあとまで引用する。

Нет, эта гениальная поэма не подражание! Тут уже подсказывается русское решение вопроса, «проклятого вопроса», по народной вере и правде: «Смирись, гордый человек, и прежде

всего сломи свою гордость. Смирись, праздный человек, и прежде всего потрудись на родной ниве», вот это решение по народной правде и народному разуму. <...> «Не вне тебя правда, а в тебе самом; найди себя в себе, подчини себя себе, овладей собой – и узришь правду. <...> Победишь себя, усмиришь себя; найди себя в себе, подчини себя себе, овладей собой – и узришь правду. <...> и поймешь наконец народ свой и святую правду его. <...> (Пш)

いや、この独創的な物語詩は模倣ではない！ ここにはすでに、問題にたいする、「呪われた問題」にたいする、民衆の信仰と真実によるロシア的解決が暗示されている。「従順になれ、おごれる人間よ、そして何よりもまず、おのれのおごりを捨てよ。従順になれ、無為なる人間よ、そして何よりもまず、故郷の畑で仕事に励め」——これが民衆の真実と民衆の知恵による解決なのである。[…]「真実はおまえの外にはなく、おまえ自身のなかにある。おのれのなかにおのれをみいだせ、おのれをおのれに従わせよ、おのれを御するのだ、そうすれば真実をみいだすだろう。[…] おのれに打ち勝て、おのれを抑えよ […] そうすれば、最後には、おのれの民衆とその聖なる真実をつかむだろう。[…]

この引用の最初の方にある、「民衆の信仰と真実にもとづいて」という2項等置と、しばらく離れたところにある「民衆の真実と民衆の知恵にもとづく」という2項等置をならべてみるなら、「(民衆の) 真実」を前辞反復 (anadiplosis) 的に共有している (1回目は第2項に、2回目には第1項に用いている) ことがわかる。そして最後には、「おのれの民衆とその聖なる真実をつかむだろう」と、これら最重要概念を、あらたな形容詞「聖なる」をくわえながら、ふたたび等置する形で終わっている。

このように、このテキストはレトリックにあふれているが、ただし留意すべきは、3.2で述べたように、この部分はドストエフスキーがプーシキンの作品に登場する民衆の語り口を模倣している部分であり (したがって引用符でくくってあり)、そこにドストエフスキーの思想があらわれているとしても、表現は他者的なものを意識的にとりこんだものなのである。レトリックもまた「対話」、「間テキスト性」のなかで理解しなければならないことを示す例である。

5.2.3 先行テキストとの対話：プーシキン『エヴゲーニー・オネーギン』

ドストエフスキーはさらにプーシキンの代表作『エヴゲーニー・オネーギン』を中心に自説を展開していく。そこでの2項等置表現をみてみよう。

поставив тип положительной и бесспорной красоты в лице русской женщины (Пш)

ロシアの女性のなかに、肯定的で議論の余地のない美のタイプを打ち立て

Главная красота этих типов в их правде, правде бесспорной и осязательной <...> (Пш)

これらのタイプの主要な美は、真実のなかに、議論の余地のない、触知しうる真実のなかにある […]

1 つ目の引用は、『エヴゲーニー・オネーギン』のヒロインについて述べている箇所、2 つ目の引用は、しばらくあとのところで、同様のことをプーシキン他の作品について述べた箇所である。これら2つの引用のあいだでは、2つの形容詞が、さきほどの例と同様、1つが前辞反復的にくりかえされ、もう1つが別のものに置きかえられている。そしてここでも、等置される形容詞は「真実」とか「美」といった、重要な概念をあらわす名詞（したがって反復して使用される名詞）にかかっている。これらはすべて、注意深くみないと気づかないことであるが、2項等置の可能性を十全に利用したレトリックといえるだろう。

なお、このすこし前のところでも、かなり類似した形容詞の2項等置が使われている：бессмертной и недостижимой поэме (Пш)「滅びることのない、到達不能な物語詩」(『エヴゲーニー・オネーギン』をさす)。これらをならべてみると、一定の枠のなかで適切な形容詞をつぎつぎに探していこうとしているように感じられる。

また、第1項が名詞、第2項がその名詞を形容詞化して別の名詞を修飾するというやり方（それによりターゲットを絞っていく）もよく使う。

в нашем интеллигентном обществе, оторванном от народа, от народной силы (Пш)

民衆から、民衆の力から切り離されたわれわれの知識人社会では

не мечом приобретенная, а силой братства и братского стремления нашего к воссоединению людей (Пш)

剣によってではなく、兄弟愛と、人びとの統合をめざすわれわれの兄弟的な志向の力によって獲得された

このように、2項をつらねて概念を限定していくところにも、適切な語を探しあてようとする思考の動きが感じとられる。

いずれにせよドストエフスキーは、一定の範囲のなかで、なんらかの類似性をもった 2 項を探りだしてならば、あるいはときに不安定で新奇な語結合となる等置表現をつくりだし、それによって意味の範囲に揺らぎをつくりだしたり、逆に焦点を絞ったりしながら、読者の脳裏に論理と感情を同時に刻印する——そういう手段として 2 項等置表現を頻繁に用いているようにおもわれる。

5.2.4 独自の立場と独自の表現：「全世界性と全人類性」

つぎは演説の結論部で総括的な考えを述べているところをみてみよう。そこでは 2 項等置のなかに 2 項等置が含まれている。

Я говорю лишь о братстве людей и о том, что ко всемирному, ко всечеловечески-братскому единению сердце русское, может быть, из всех народов наиболее предназначено, вижу следы сего в нашей истории, в наших даровитых людях, в художественном гении Пушкина. (Пш)

わたしがいっているのはただ、人々の兄弟愛について、そして、もしかすると、すべての民族のなかでロシアの心がいちばん、全世界的な、全人類的＝兄弟的な統一へと定められているのかもしれないことについてだけだ。 わたしはこのことしるしを、われわれの歴史のなかに、われわれの才能あふれた人びとのなかに、プーシキンの芸術的天才のなかにみる。

これは全体で 1 文であるが、前半は 2 項等置が 2 重になっている。すなわち、1 つ目（二重下線部）の о братстве людей и о том, что ... 「人々の兄弟愛について、そして…ことについて」の第 2 項をなす節は、もう 1 つの 2 項等置 ко всемирному, ко всечеловечески-братскому 「全世界的な、全人類的＝兄弟的な」を含んでいる。このうちの第 2 項は、さらにハイフンで 2 語が結合されている。なお、最後の締めくくり（点線部）は、前置詞を伴う副詞句の 3 項等置になっている。かくしてこの 1 文は、「いっているのはただ」とあるように、ただ 1 つの主張をうちだすために、きわめて多くのことばとレトリックを費やした、濃密な表現となっている。そして最後にこう述べる。

Повторяю: по крайней мере, мы уже можем указать на Пушкина, на всемирность и всечеловечность его гения. (Пш)

くりかえしている。すくなくとも、われわれはすでに指し示すことができる、プーシキンを、彼の天才の全世界性と全人類性を

これも2重の2項等置である。すなわち前置詞をともなう副詞句（コンマによる等置——下線部）と、その第2項に含まれた名詞の2項等置（等位接続詞иによる等置——二重下線部）である。「くりかえしている」とあるように、結論部にあるこの1文が、ドストエフスキーの演説のエッセンスなのであり、それが、「全世界性と全人類性」という、類義的・余剰的2項等置表現で示されているのである。

5.2.5 「大審問官」と「プーシキン演説」のまとめ

ドストエフスキーの「プーシキン演説」と「大審問官」は、テーマだけでなく、言語表現とレトリックを共有し、それだけからでもドストエフスキーの強い個性が伝わってくるが、論理性・明晰性を志向する同時代の作家トゥルゲーネフと比べることで、さらに浮かびあがる。ドストエフスキーにおける2項等置表現の特徴は、①2項等置表現がそもそも多い、②コンマよりも等位接続詞による等置が多い、③動詞句の2項等置が多い、④動詞句以外では、論理関係が明晰な2項等置よりも、論理関係が明晰でなく、余剰的で意味の厚みを増すような類義的2項等置が多い、⑤そうした2項等置の多くは、表出性を高めるとともに、対象を拡大して詳細に提示するはたらきもしている、ということができる。

6 まとめ

6.1 対話と2項等置

ドストエフスキーの2項等置の重要な役割は表出性と詳細提示にあると述べた。しかしその一方で、ドストエフスキーのテキスト全体は論理によってつらぬかれていることを忘れてはならない。そもそも2つのもの対置することは、ドストエフスキーにとってきわめて重要なことである。たとえば「プーシキン演説」では、プーシキンの登場人物であるタチヤーナとオネーギンの対置が、大地に根づくロシアの民衆と根無し草の知識人の対置の典型として、ドストエフスキーの主張のかなめを表現するし、「大審問官」では、自由をめぐるキリストの立場と大審問官の立場の対置が、展開される思想の本質といってよい。

ドストエフスキーのことばには、意識が意識に、思想が思想にむきあうありさまがよくあらわれている。バフチン (Бахтин 2002) のことばでいえば対話的關係である。小説の登場人物たちについても、それらが作者ないし語り手によって1つの場のなかで、1つの視点から俯瞰的・モノローグ的に対置される度合いは少ない。こうした対話的な提示法は、

小説のことばだけでなく、評論のことばにも観察される。トゥルゲーネフが行っているような、1文のなかに対置を織りこんだ表現をドストエフスキーがあまり用いないことは、そうした対象の対話的なあつかいと関連する可能性がある。

2項等置という表現手段も、2つのものを1つの場に、1つの視点から統括して提示するものであるから、対話的対置には適さない。対話的対置は、プロットのなかで、ないし主張の構成のなかでなされる。一方、対話のそれぞれの主体はというと、小説の登場人物や語り手であれ、評論や演説の書き手・話し手である作者自身であれ、自分の主張を展開するには、論理をうちだしつつもきわめて表出的となる。ドストエフスキーの場合、そうした表出的手段の1つとして、2項対置が用いられているということであろう。

6.2 2項等置表現の広がり

以上、ドストエフスキーの演説および小説のなかで、論理による説得をめざすテキストを材料に、2項等置表現を考えてきた。最後に、この表現がさらに広がりをもつものであることに触れておきたい。

2項等置は、論理的テキストとは異なるタイプのテキストにもみられる。小説の語りの例を3.3ですこしみたが、それは出来事を外的視点から語るテキストで、対象への一定の距離をとるものであった。つぎに掲げる『白痴』の例は、登場人物の内面を、その人物の内的視点から語る例である。

Почему-то ему всё припоминался теперь, как припоминается иногда неотвязный и до глупости надоевший музыкальный мотив, племянник Лебедева, которого он давеча видел. <...> Много читал и слышал о таких вещах с тех пор, как въехал в Россию; он упорно следил за всем этим. <...> Припомнил и полового; это был неглупый парень, солидный и осторожный, а «впрочем, ведь бог его знает какой. Трудно в новой земле новых людей разгадывать». <...> А впрочем, какой иногда тут, во всем этом, хаос, какой сумбур, какое безобразие! И какой же, однако, гадкий и вседовольный прыщик этот давешний племянник Лебедева! <...> А какое симпатичное, какое милое лицо у старшей дочери Лебедева, вот у той, которая стояла с ребенком, какое невинное, какое почти детское выражение и какой почти детский смех! («Идиот», ч. 2, гл. 5).

なぜか彼はいま、耳にこびりついた、ばかげたほどうんざりする音楽のモチーフがときに思いだされるように、さっき会ったレーベジェフの甥のことばかり思いだされた。[...] ロシアにやってくるまで、こうした事柄をたくさん読んだり聞いたりした。彼はこれら

べてを熱く注視していた。〔…〕ウェイターその人のことも思いだした。なかなか利口な若者で、きちんとした、注意深い若者だった、「だが、どんな人間かは神のみぞ知るだ。新しい土地で新しい人たちのことを見極めるのは難しい。」〔…〕だがそこに、こうしたことすべてに、ときになんというカオス、なんという支離滅裂、なんという醜悪さがあることだろう！ けれど、あの、さっきのレーベジェフの甥は、なんといういまわしい、自足しきった下司野郎だろう。〔…〕だがレーベジェフの上の娘、子供を抱いて立っていたあの娘は、なんという感じのよい、なんというかわいらしい顔をしているのだろう、なんという純真で、なんというほとんど子供のような表情、なんというほとんど子供のような笑いだろう！（『白痴』第2部第5章）

これは主人公ムイシュキンが、歩きながら、それまで起こったことに思いをめぐらせるさまを描写したものである。ここでは、ときに引用符をつけた直接話法が用いられる以外は、主人公の内面が語り手の視点から述べられる部分と、自由間接話法によって登場人物の視点から述べられる部分とが交替しながら進み、最後にはほとんど自由間接話法で占められていく。

このテキストは推論テキストとはいえない。説得の要素はもちろんのこと、距離をおく視線もなく、混沌とした主観的印象を言語化したものである。ここには形容詞の2項等置が5回、動詞の2項等置が1回でてくる。とくに形容詞は強い感情を伴う主観的印象を伝えるものである。後半では、二重下線で示した疑問詞 *какой* またはその変化形（「なんという」と訳した）で始まる感嘆文が重ねられている。引用の範囲内では、疑問詞 *какой*（の変化形）が3回使われた文、つぎに1回使われた文があり、中略のあとは5回使われた文で終わっている。それらの感嘆文のなかにも形容詞の2項等置が2つ入っている。

ここで感嘆文の反復は、感情が波打つさま、内的リズムを伝える役割をはたしている。2項等置も構造の反復であるから、それもリズムを伝えるはたらきをしているだろう。ここで2項等置表現を含むパラレリズムがもともと詩、リズムをもったテキストに特有のものであったことが思いおこされる。ドストエフスキーの散文においても、パラレリズムは内的リズムを反映し、弁論であれ、語りであれ、心の動きを乗せる型となっているのはたしかである。しかしドストエフスキーにおける2項等置の役割はそれにとどまらない。

ここで、3.3で述べたことに戻りたい。すなわち、表現をあえて曖昧にすることで、明瞭でない現実アプローチするというドストエフスキーの姿勢である。これについて筆者は以前『白痴』を材料に考察したことがある（郡 2021）。そこで示したことは、出来事であれ、状態であれ、直観的な思考であれ、感情であれ、それを「直接性ないし臨場性の錯覚」の

効果をもって伝えるために、ドストエフスキーは「不確定性」をこととする言語手段を最大限活用したということであった。

本稿でみてきた余剰的・拡大的2項等置の特徴は、この言語的「不確定性」の志向とも関連するであろう。もちろん、3.3 でみたりハチョーフの挙げる事例は外的視点からの語りのテキストであり、また、いまみた事例は内的視点による語りのテキストであり、読み手・聞き手に主張をたたみこむ弁論的テキストとは性格が異なる。しかし、対象を簡潔で的確に提示するよりも、ことばを多めに費やしながらか、曖昧性を含んだ形で提示し、そのことによって読み手に、事象が単純な理解をこえた広がりや深みをもつという印象をもたらす点では同じである。このドストエフスキーのテキストにひろく観察される言語的志向が、2項等置にもあらわれていると考えられるのである。もちろん、ドストエフスキーが他方で、必要な場合には簡潔で的確な表現を重んじていたことも、すでに述べたとおりである。

論理と感情（あるいは主観）という観点から考えるなら、単純な構造反復である2項等置は、より単純な同一語句反復とならんで、感情・主観の表出を担うことができる。一方で2項等置表現は、同一語句反復と比べると、2項関係の設定により、一定の論理を担いうる。そして、外的／内的視点の語りであれ弁論であれ、あつかおうとする対象が単純にわりきれず、客観と主観、論理と感情にまたがって存在する場合、それらをまたぐ領域に適用できるような最小の汎用的な修辭装置として、2項等置表現は活用しうるといえるだろう。

おそらく2項等置表現は、他の多くの作家の芸術的散文でもたくさん用いられている。ここでいえることは、ドストエフスキーにおいては2項等置表現の使用頻度がきわめて高く、弁論から内的視点の語りまで、さまざまなタイプのテキストで用いられることである。ドストエフスキーにおける2項等置表現は、フォークロアや古代の詩のテキストにおける規範化されたパラレリズムとは違った形で、思考や感情を言語化し、ことばを発するための1つの個人的な型となっているといっていよう。

以上、本稿では、ドストエフスキーの「大審問官」と「プーシキン演説」という、推論的・弁論的性格をもつテキストを中心に、そこに頻繁に使用される2項等置表現を観察し、その修辭的・文体的機能を考察した。一方で、小説の「語り」における2項等置表現の実態と役割、推論的・弁論的テキストと語りのテキストの関係といった問題については、今後の課題ということになる。

文献

(引用における各種の下線は、とくに断らない限り本稿の筆者による。)

作品テキスト

ドストエフスキーの作品からの引用は以下によった。

Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Л.: Наука. Ленинградское отделение, 1972–1990.

本稿でとりあげたおもな2つの作品の略号と、そのタイトル、掲載箇所は以下の通り。

ВИ: «Великий инквизитор» («Братья Карамазовы», ч. 2, кн. 5, гл. 5). Т. 12. С. 224–241.

Пш: «Пушкин (очерк)» («Дневник писателя», 1880 г., гл. 2). Т. 26. С. 136–149.

トゥルゲーネフからの引用は以下によった。

Тургенев И. С. Полное собрание сочинений и писем: В 30 т. М.: Наука, 1978–2014.

本稿でとりあげた作品とその掲載箇所は以下の通り。引用に際しては Тург. と記した。

Тург.: <Речь по поводу открытия памятника А. С. Пушкину в Москве>. Сочинения Т. 12. С. 341–350.

聖書からの引用は、『新共同訳』（日本聖書協会）によった。

なお、他の言語による新約聖書のテキスト（ロシア語『シノド聖書』（Синодальный перевод）、ギリシア語原文、英語訳 King James Version および English Standard Version）も参照し、必要に応じて注で言及した。

研究文献

郡 伸哉 (2021) 「ドストエフスキー『白痴』の言語表現における「臨場性の錯覚」」、『文化科学研究』32、中京大学文化科学研究所、1–26頁。

佐々木健一〔監修〕(2006)『レトリック辞典』大修館書店。

ヤーコブソン、ロマーン (1973 [1956]) 「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、同著『一般言語学』みすず書房。(Jakobson, Roman. Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances.)

ヤーコブソン、ロマーン (1973 [1960]) 「言語学と詩学」、同著『一般言語学』みすず書房。(Jakobson, Roman. Linguistics and Poetics.)

ヤーコブソン、ロマーン (1985 [1966]) 「文法的平行性とそのロシア語における面」、『ロマーン・ヤーコブソン選集3』大修館書店。(Jakobson, Roman. Grammatical Parallelism and its Russian Facet.)

Fox, James J. (2014) *Explorations in Semantic Parallelism*. Acton, ACT: ANU Press.

Бахтин М. М. (2002) Проблемы поэтики Достоевского // Бахтин М. М. Собрание сочинений в 7 томах. М.: Русские словари, Языки славянских культур. Т. 6.

Иванчикова Е. А. (2010) Синтаксис художественной прозы Достоевского. 2-е изд., дополн. М.: Либроком.

Литинская Е. П. (2021) Риторика и поэтика «Пушкинской речи» Ф. М. Достоевского // Проблемы исторической поэтики. Т. 19. № 2. С. 141–175.

Лихачев Д. С. (1981) «Небрежение словом» у Достоевского // Лихачев Д. С. Литература — реальность — литература. Л.: Сов. писатель. С. 73–96.

Осокина Е. А. (2014) Параллелизм: риторика или поэтика, проза или стих, особый прием или система? // Слово Достоевского 2014. Идиостиль и картина мира. Коллективная монография. М.: ЛЕКРУС. С. 447–460.

Осокина Е. А. (2019) Риторика Достоевского: pro et contra // Достоевский и современность. Материалы XXXIII Международных Старорусских чтений 2018 года. Великий Новгород. С. 109–122.